

令和 6 年度 奈良女子大学研究推進プロジェクト経費研究報告書

奈良女子大学長 殿

研究代表者

所 属 ・ 職 人文科学系・教授
氏 名 野村鮎子

本年度の交付を受けた研究推進プロジェクト経費について、下記のとおり報告いたします。

申請区分	☐ (A) 多様な人材の協働による研究
	☒ (B) 一般研究
研究課題	将来の校史編纂事業の準備のための研究 —女高師時代の学籍簿のデジタル化と第二女高師奈良設置の経緯についての研究—

1. プロジェクトの成果（研究推進プロジェクト経費が交付された期間に、この研究によって得られた新たな知見等の成果を、申請書の「研究目的、研究計画・方法」に対応させて記載すること。また、支出内訳との関係についても記載すること。）

2 ページ以内で記載してください。

本研究の目的は将来の校史編纂に向けて二つの準備作業をすることであった。一つは奈良女子高等師範学校（以下、奈良女高師）時代の学籍簿のデジタル化であり、もう一つは、いまだに不明な点が多い第二女高師奈良設置の経緯に関わる問題、たとえば奈良と文部省との交渉や京都設置派との対立についての解明である。

以下、Ⅰ「女高師時代の学籍簿のデジタル化」と、Ⅱ「第二女高師奈良設置の経緯についての研究」に分けて記す。

Ⅰ. 女高師時代の学籍簿のデジタル化について

(1) 女高師時代の学籍簿の教育史的意義と状態

学籍簿が高度な個人情報に属する文書で、対外非公開であることはいうまでもない。ただし、一方で、奈良女高師の学籍簿は日本の女子教育史にとって貴重な歴史的遺産、教育文化財であることも事実である。なぜならば、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）は本学より 18 年早い 1890 年の設置であるが、関東大震災（1923 年）によってそれ以前の学籍簿は焼失しており、そのため、奈良女高師の学籍簿は明治時代の官立学校の学籍簿の様式を今に伝えるものとして史料価値を有するからである。しかし、当該の約 70 冊の学籍簿は一番古いものはすでに 111 年を経過しており、綴じ紐が朽ち、用紙の劣化が進んでおり、また副本がないため、万一災害があった際には、永久に失われる怖れがあった。一刻も早いデジタル化が望まれる状態であった。

(2) 学籍簿の学術的価値とデジタル化の作業

研究代表者は、このたび研究推進プロジェクト経費を得たことで、学芸員の資格を有し、かつ本学所蔵の歴史的文物を扱った経験を有する卒業生 2 名を雇用し、デジタル化作業を効率よく進めることができた（支出内訳の謝金項目参照、若干不足したため野村の研究経費から補填した）。作業にあたっては、まず野村を含む 3 名が守秘義務とデータの扱いに関する誓約書を学務課に提出し、保秘のため学籍簿は E 棟 1 階の倉庫から帯出しないことを原則とした。作業手順としては、簿冊を慎重に取り出し一枚ずつ裏表ともに順次スキャンし、その画像データに氏名をつけて保存、同時に簿冊の綴じ紐を交換する流れで行った。途中、ス

キャナー故障のため修理に出した（支出内訳のその他の項目参照）がおおむね順調であった。

一連の作業を終え、pdf化した学籍簿の画像データは、ポータブル型 HDD（支出内訳の消耗品参照）に格納し、令和7年2月28日に学務課と学術情報センター校史資料室に引き渡した。学籍簿が保管されている金庫には調湿保存剤を入れておいた（支出内訳の消耗品参照）。

なお、学籍簿の画像データは以下のように整理した。

01 奈良女子高等師範学校 1～40回

02 研究科（大正2年以降）

03 第三臨時教員養成所 1～6回

03-1 大正13年卒 第1回（数学・理科）

03-2 大正14年卒第2回（理科）

03-3 大正15年卒 第3回（歴史地理・国語漢文）

03-4 昭和4年卒 第4回（歴史地理・国語漢文）

03-5 昭和6年卒 第5・6回（数学）、昭和7年卒（歴史地理） コレ以降募集セズ

03-6 昭和19年卒（数学 第1回）・昭和20年卒（家政 第1回・数学 第2回）・

昭和22年卒（家政 第2回・数学 第3回）・昭和23年卒（家政 第3回・数学 第4回）

04 特設豫科（自昭和9年4月入学全19年4月入学）

05 奈良特設中等教員養成所（昭和22年・23年）

06 保姆養成科・保育科

（3）デジタル化の効果

学籍簿のデジタル化によって氏名による検索、卒年や卒業学科による検索が可能のため、学務課は学籍に関して卒業生の遺族などから照会があった際に、学務課は紙の学籍簿の簿冊を一冊ずつ繰らなくとも、瞬時に学籍を確認することが可能になった。

また、学籍簿の個別の記載内容は非公開としても、総体としてみた時、これが女子の子応答教育に関する貴重な研究資源（たとえば在籍者の出身地域の推移の分析、健康状態、肺病罹患率の量的分析などが想定されよう）であることは疑いない。将来の校史編纂事業の際に役立ててもらいたい。

Ⅱ. 第二女高師奈良設置の経緯をめぐる研究

（1）これまでの校史の奈良女高師設立に関する記述の矛盾

『奈良女子大学六十年史』『奈良市・県の官立学校誘致の動き』（pp.22-23）によれば、日清戦争直後に、当時東京美術学校校長であった岡倉覚三（天心）が奈良県知事の古沢滋に美術学校の設置のためまず分校を置くことを働きかけ、奈良町会議員らが奔走し、佐保村大字法蓮常陸山附近の三千坪の土地を選定して文部省に献納（寄附）した。ところが、その地を視察した文部大臣樺山資紀によって、山地で面積狭小で官立学校の敷地としては不都合とみなされたため、県と市が協議し、県有の監獄移転新築予定地（江戸時代の奈良奉行所の跡地で、聖武天皇陵から近いこの土地に監獄を新築し絞首台を設けるのは不敬だという声があってそのままになっていた）の二万有余坪を先の法蓮の三千坪と交換し、市はあらためて二万有余坪を文部省に寄附した。その後、文部省から美術学校分校設立は不可能だが、女高師ではどうかという打診があり、地元はこれを受け入れたという。

これに対して『奈良女子大学百年史』『東京美術学校奈良分校用地—奈良女子高等師範学校の敷地』（pp.32-33）は、昭和9年に奈良女高師が作成した『開校二十五周年』や大正3年の沢柳政太郎〔奈良女高師設置が議会を通過した時の文部次官〕の本校における講演にもとづき、文部省は明治31年の八年計画の時点ですでに第二女高師を議しており、土地交換

の時点で第二女子高等師範学校用地として寄附されたのだとする。同じ本学の学校史でありながら、奉行所跡地は美術学校用地として寄附されたのか、女高師用地として寄附されたのかという点で混乱が生じていた。また、これまでの校史は、奉行所跡地の寄附者は奈良市だとしているが、県有財産をいったん市有財産にしてから寄附の手続きを取ったというのも不自然であり、寄附については確実な史料にもとづいて再検証する必要がある。

また『六十年史』は触れていないものの、第二女高師は京都にという動きもあった。『百年史』はこれに関して、明治40年の帝国議会で第二女高師を奈良に設置する政府案に対して京都市に設置する提案がなされたことに触れ、「議会において、僅かな差で、奈良に設立することが可決された」と説明している。しかし、この記述は正確ではない。また可否同数となるほど京都設置派が力をもったのはなぜなのか。明治39年秋から翌40年にかけて京都は官民挙げて誘致運動を行い、奈良も懸命に防戦するのだが、この誘致合戦についてはこれまで全く先行研究がなかった。

そこで本研究は、将来の校史編纂のために、過去の学校史の奈良女高師設置の経緯に関する記述を再検証し、これまで用いられてこなかった奈良県の行政文書や明治期の新聞記事、当時の人の回顧録などに基づいてこの問題を整理し、これまでの校史の誤謬を修正した。

(2) 本研究で明らかになったこと

奈良女高師の設置に至る経緯について再検証した結果、以下のことが判明した。

まず『六十年史』が「奈良県では……いったん奈良市に提供し、奈良市はこの二万坪の土地を文部省にあらためて寄附し」と、市が奉行所跡地を寄附したようにいうのは誤りである。奈良県行政文書を調査した結果、寄附をしたのは奈良県であった。ただし、岡倉天心から奈良に美術学校の分校のため土地の選定をと最初に依頼があった際に積極的に動いたのは奈良町(奈良市)である。郡山町の柳澤伯爵家が土地の寄附を行うという噂を知った奈良町は、県立尋常中学のように郡山町へ奪われてはならぬという対抗意識から佐保村大字法蓮常陸山附近の三千坪を買い上げ、明治30年2月26日にこれを文部省に献納した。しかし、32年4月の樺山資紀の巡察の際にこの地が傾斜地であること、文部省直轄学校を建設するには敷地も足りないこととされたことから、市は県と相談し、監獄移転先として県が準備しながらも、聖武天皇陵の下に絞首台を含む監獄を置くのは不敬だという理由でそのままになっていた県有の奈良奉行所跡地を、奈良県が明治32年10月18日に文部省に献納した。ただし、これより先、文部省で八年計画の策定に関わっていた文部省参事官の岡田良平は、樺山大臣の巡察に同行した後、明治32年5月14日、単独で奈良に立ち寄り、対山楼で寺原知事に関西に女高師を設置する案を打診し、奈良から前向きな回答を得たことで、「八年計画調査書」には関西での第二女高師計画が盛り込まれた。しかし、「八年計画調査書」は閣議で却下されたため、関西の第二女高師設置計画が公になることはなく、土地が奈良女高師用地として寄附されたことを知るのは文部省と奈良の上層部に止まった。奉行所跡地の二万坪の土地は、公的な書類では、東京美術学校敷地の名目で寄附されているが、寄附の動機は女高師設置という密約があったためである。

文部省に女高師設置を約束された奈良だが、その後は政府の財政難と日露戦争のため、設置の見込みがつかず、事態が動き出すのは明治39年の秋ぐらいからである。しかし、奈良設置の噂が伝わるや否や、『京都日出新聞』の主筆大道雷淵による京都への誘致キャンペーンが始まる。雷淵の檄文は京都市会や府会を動かし、さらに京都選出の代議士を動かした。一方の奈良でも市長や市会議長、奈良選出の代議士はさかんに当局に働きかけを続けた。双方の地方政界や政党を巻き込んだ誘致合戦は、ついに第二女子高等師範学校の設置場所をめぐる京都設置派が帝国議会に建議案を提出するという事態にまで発展した。1票差で否決

された建議案だったが、のちに二重投票の過誤が発覚し、対応を一任された議長は、建議案反対に入れた1票は無効として、その一方で過半数を超えない建議案は否決されたものと結論した。つまり、現在、一部の新聞では一票差で奈良設置が決まったという説が行われているが、これは厳密に言えば誤りであることも判明した。

帝国議會を二分するような事態を招いた直接的な原因は、奈良設置を約束しながら、京都にそのことを明言しなかった文部省の曖昧な態度であったが、直轄学校の設置には地元からの敷地の寄附を必要とした当時の財政事情もあった。学校の設置が地元にとってどれほど重大な政治課題であったかは、奈良と郡山の攻防でも明らかである。またすでに多くの官立・私立学校を有していた京都であったが、彼らを第二女高師の誘致に駆り立てたのは、明治20年代の美術学校誘致に始まる奈良への対抗意識と、関西の教育の中心であるという矜持であろう。そこには『京都日出新聞』のような地方政界を動かすジャーナリズムが果たした役割が大きかったといえる。

(3) 設置の再検討に用いた史料

最後に今回の研究で発見し、用いた史料は以下のとおりである。将来の校史編纂に役立ててほしい。なお、下記史料収集のために近畿圏出張交通費（支出内訳の旅費）、史料複写（支出内訳のその他）を使用した。

1. 奈良女子大学学術情報センター所蔵「奈良女子大学校史関係史料」
 - ・二 - 補 12〔庶務関係記録〕『開校二十五周年』、奈良女子高等師範学校、昭和9年4月25日。画像データ：<https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/kousi/html/h02/n62/p002.html>
 - ・三 - 4〔教務日誌〕『教務係日誌』大正3年1月～大正4年3月（特34）所収大正3年4月9日前京都帝国大学総長講話、講話大要「本校設立ノ由来并ニ同氏トノ縁故」
 - ・二十六 - 補 10『佐保会誌 母校創立25周年記念号』（昭和9年7月）、八木逸郎「祝辞（口演）」
2. 奈良県立図書館蔵奈良県行政文書
 - ・M32-19『県有財産營造物ニ関スル書類』『県有財産ニ関スル件』第一号「美術学校敷地登記終了ニ付報告ノ件」
 - ・M37-20『市有財産台帳』
3. 奈良県立図書館蔵永田家文書
 - ・明治四拾年三月来翰[封書 92 葉書 89 電報 7 一括] 68-191-3、資料 ID557045619 の包紙、明治40年3月1日付『伊和新報（やまと日報改題）』
4. 奈良県立図書館蔵奈良県会議録
 - 『明治二十六年度通常奈良県会議録』
5. 奈良市史料保存館蔵
 - 『奈良市公報』（M38.10.20、M40.2）
6. 奈良市役所蔵
 - 『京都市参事会記録』（M39.12.14）
7. 京都市会図書館蔵
 - 『明治三十年度京都市会議録』、同決議録、『明治四十年京都市会議録』第九号、同『決議録』
8. 京都府立京都学・歴彩館蔵
 - 『明治三十九年京都府通常府会会議録』、『同決議録』
9. 天理大学附属図書館蔵近世文書
 - ・116 - 5 奈良町対山楼文書、近 01 - 5『定客姓名簿』。
 - ・116 - 5 奈良町対山楼文書、近 08 - 12『大福帳』

10. 柳澤文庫副理事長柳澤保徳氏個人蔵

- ・柳澤伯爵家「明治三十年日誌」

11. 外務省外交史料館蔵「文部省八年計画調査書」(3.10.2.14)

- ・JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B12081981100 (第 30～31 画像目)

12. 学校史

- ・奈良女子大学六十年史編集委員会編『奈良女子大学六十年史』(奈良女子大学、1970 年)
- ・奈良女子大学八十年史編集委員会編『奈良女子大学八十年史』(奈良女子大学、1989 年)
- ・奈良女子大学百年史編集委員会『奈良女子大学百年史』(奈良女子大学、2010 年)
- ・佐保会編『寮史——寮生の声を集めて 奈良女子高等師範学校・奈良女子大学旧寮の変遷』(1990 年 3 月)
- ・東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇卷一(1987 年) 第 4 章関連事項③「美術教育施設ニ付意見」と岡倉覚三の本校拡張計画、④京都高等美術学校および美術院奈良分院設置計画
- ・奈良県立郡山高等学校創立百周年記念事業実行委員会・百年史編集委員会編『奈良県立郡山高等学校百年史』(1994 年)

13. 回顧録・年譜など

- ・正木直彦『回顧七十年』「岡倉覚三一文相秘書官」(学校美術協会出版部、1937 年)
- ・正木真彦『十三松堂閑話録』「文展二十五年」三(相模書房、1937 年)
- ・松浦鎮次郎編『岡田良平先生伝』(松浦鎮次郎刊、1935 年) 附録「岡田良平略年譜」

14. 地方史

- ・仲川明・森川辰蔵共編『奈良叢記』「奈良の美術院」(駸々堂、1942 年)
- ・奈良実業協会編『奈良実業協会五十年』(奈良実業協会、1980 年)
- ・北村信昭『奈良いまは昔』(奈良新聞社、1983 年)
- ・奈良県農業試験場編『奈良県農業試験場 70 年の歩み』(奈良県農業試験場、1963 年)

15. 官報

『官報』(M32.2.28)、『官報号外』(M40.3.18)、『官報号外』(M40.3.27)

16. 新聞・雑誌

- ・『京都美術協会雑誌』第 57 号 (M30.2)、第 86 号 (M32.8)、第 89 号 (M32.11)
- ・『教育報知』617 号 (M32.7.25)
- ・『日出新聞』(M24. 1.18、M25.8.10)
- ・『京都日出新聞』(M39.10.14、M39.10.24、M39.11.3、M39. 11.5、M39. 11.6、M39. 11.7、M39.11.15、M39.11.22、M39.11.23、M39.11.30、M39.12.2、 M39.12.5、M39.12.7、M39.12. 8、M40.1.26、M40.2.1、M40.2.2、M40.2.5、M40.2.6、M40.2.7、M40.2.8、M40.3.9、M40.3.10、M40.3.17、M40.3.20、M40.3.27、M40.3.28、M40.3.29)
- ・『東京朝日新聞』(M26.3.1、M30.8.20、M32.4.27、M32.5.18、M32.5.22、M32.5.28、M32.7.13、M32.10.1、M34.3.31、M39.10.20、M39.11.15、M39.11.23、M39.12.7、M39.12.9、M40.3.27、M40.3.28、)
- ・『奈良新聞』(M32.3.9、M32.4.27、M32.4.28、M32.5.14、M32.5.20、M34.1.23、M34.1.24、M34.2.2、M34.2.3、M34.2.5、M34.2.6、M34.2.17、M34.3.4、M34.3.7、M39.4.3、M39.10.25、M39.12.4、M39.12.26、M40.1.10、M40.1.16、M40.2.1)
- ・『大阪朝日新聞』(M30.7.17、M31.3.1、M40.1.7、M40.1.14)
- ・『読売新聞』(M30.2.17、M 32.7.18、M39.11.18、M40.3.20)
- ・『毎日新聞』(M37.7.9)

2. プロジェクト成果の発表

(論文名, 発表者, 発表雑誌等, 巻・号, 発表年等)

・野村鮎子「奈良女子高等師範学校設置の経緯に関する再検討—文部省との交渉および京都との攻防—」、『奈良女子大学文学部研究教育年報』21号、2025年3月、pp.1－17

・奈良女高師の学籍簿の画像データ（ポータブル型HDD）については、令和7年2月28日に学務課と学術情報センター校史資料室に提出済

3. 支 出 内 訳						
備 品 費		消耗品費	旅 費	謝金等	その他	計
品 名	金 額					
	円	51,750円 外付HDD 2 台 調湿保存剤	5,480円 野村近畿圏 出張旅費	691,670円	1,550円 新聞等複写 1,550円 スキャナー故障 による返送	752,000円